

Title	ヴォローネジ地方の歴史から
Author(s)	土肥, 恒之
Citation	一橋論叢, 114(3): 612-619
Issue Date	1995-09-01
Type	Departmental Bulletin Paper
Text Version	publisher
URL	<a href="http://doi.org/10.15057/12175">http://doi.org/10.15057/12175</a>
Right	

《資料紹介》

ヴォロローネジ地方の歴史から

土肥 恒之

はじめに

ロシアにおいて地域史研究はどのような形でおこなわれてきたのだろうか。その視点なり方法において帝政時代とソ連時代とではいかなる相違があったのだろうか。そして現在、どのような問題群に関心が向けられているのだろうか。我が国のロシア史研究においては管見の限り、こうした問題にほとんど注意が向けられてこなかったようにみえる。その理由の一半はロシアにおける地方自治、あるいは地域主義の伝統の弱さそしてその結果としての研究の停滞にあると推測される。けれども、このことは地方自治の完全な欠如を、そしてまた地域史研究の無視を意味するものではないだろう。だが筆者にはこのきわめて広範に及ぶ問題についてここで説得的に展開する用意はない。そこで偶々筆者の関心を惹いたロシア南部の一地域ヴォロローネジを取りあげ、この地域についてこれまでの研究史を概観すること、そして最初の鑑を入れた著作とその著者について紹介し、簡単なコメントを加えることでこの大きな問題への手がかりを探ることにしよう。

ヴォロローネジ地方の中心都市ヴォロローネジは十六世紀末、正確には一五八六年にクリミア・タタールの侵攻からロシア中央部を守るために他の八つとともに建設された要塞として出発した。十七世紀に入ると、この要塞都市を中心にして「郡」が形成され、そして十八世紀はじめにはピョートル大帝の「県」制の導入によってできたアゾフ県の県都となった。更に大帝死後の一七二五年、アゾフ県はヴォロローネジ県へと改められた。だがこの県は途方もなく広大な地域を含んでおり、エカテリーナ二世の地方改革を経て、ようやくヨーロッパ・ロシア五十県の一つとしてのヴォロローネジ県(十二郡)の原型が形づくられた。その後も県境の変更は一度ならず行なわれ、したがって面積そして人口も以下のようにかなり大きな変動がみられたのである。

年 度	面積(平方 ワルスタ)	人口
一七九六	三五、九〇〇	四四八、〇〇〇
一八九六	五七、九〇〇	二、五三一、〇〇〇

ヴォロローネジ地方の歴史研究は一八〇〇年にこの町で出版された『ヴォロローネジ県の歴史、地理並びに経済の記述』にはじまる。著者ボルホヴィチノフはヴォロローネジに生まれ育った人だが、キエフ府主教として生涯をおえた著名な教会人であった。最近出版された歴史百科『祖国史』第一巻(一九九四年、二六五頁)にも経歴が紹介されているが、この著作と著者については次項以下で少し詳しく紹介することにしよう。十九世紀に入ると、まず一八三五年に県に「統計委員会」ができ、史料蒐集

そして研究の中心となる。とりわけヴトロフ (Ветроф, 1818-1866) による古い手書本の蒐集は「ヴトロフの箱」の名で知られているが、史料刊行のための定期的な雑誌の発刊も彼のイニシアティブによる所が大きかった。他方で、ツァーリ政府も一八八四年の法令で史料蒐集と古文書館の組織化を促した。その結果、革命前にはロシア全体で三十七県に「古文書委員会」が設置されたが、ヴォローネジ県の場合には一九〇〇年にそれが設立され、活動をはじめた。委員会はいろいろな名称の史料・研究雑誌を刊行しはじめたが、ヴォローネジでも十七世紀を中心に四巻の史料集が刊行された。その他に「教会史」考古学委員会」なども組織され、それに関連する専門雑誌が刊行されたのである。

以上まったくの駆け足であるが、ヴォローネジ地域史にかかわる革命前のおもな文献・史料刊行の状況についてみてきた。十九世紀、とりわけその後半から二十世紀はじめにかけてヴォローネジ地方の歴史研究は、とくに史料蒐集の面で大きな成果をあげてきたようにみえる。因みに一八八六年は都市ヴォローネジの三百年記念ということで二巻本の論文・史料集が刊行されている。こうして革命前に蒐集され、活字にされた諸史料が現在でもヴォローネジ地域史研究の基礎をなしているのである。十月革命はロシアの歴史学において重大な転換を意味したが、新しいソ連史学(マルクス主義歴史学)が形成されるためにはかなりの時間が必要であった。そしてその間に地域史研究がどのような状態におかれたのか、については不明な部分が多い。(一九二〇年代について「黄金の十年間」と呼ばれることが多い。

るが、その真相についてほとんど調べられていない)。ただ確かなことは、史料蒐集においても具体的な研究の面でも、革命前の組織が消滅したと関連して、長い間ほとんど見るべき成果がなかったことである。そしてこの地域史研究の欠如、あるいは低調さは間接的にせよ旧ソ連体制の体質とも関連していたと推測される。すなわち旧体制は、建て前はともかく中央集権的な志向が帝政期以上につよかったこと、換言すると「地方自治」を許容する余地をほとんどたなかったからである。

ソ連時代のヴォローネジ地方の歴史研究があらわれるのは一九六〇年代に入ってからである。そしてこれにはヴォローネジ大学教授ザゴロフスキーに依るところが甚だ大きかった。ヴォローネジで生まれ育った彼の処女作は十七世紀のヴォローネジとドン・コサックとの関係、とくに「ドンへの物資支給」を扱ったものだが、一九六九年の著作『ベルゴロド線』も地域史研究の枠をこえた、十七世紀ロシア史研究の必読文献となっている。ザゴロフスキーは、こうしてヴォローネジ地域史の研究をすすめる傍ら、史料集の刊行にも大きなイニシアティブをみせている。また筆者の調査では、彼のもとで近世ヴォローネジの諸問題について学位論文を書いた人も数名いる。もとより現在の郷土史愛好者の団体なども活動しているが、ヴォローネジ地域の歴史研究におけるザゴロフスキーの貢献は飛びぬけて大きいと言っても過言ではないだろう。そして旧ソ連における地域史研究は、彼のような熱心な、だがごく少数の専門家に負う所が大きく、そうした熱心な地域史家がいないう所では研究はもとより、史料蒐集もひどく立ち遅れているというのが実情ではない

だろうか。

## 二

ヴォローネジ地方についての最初の歴史書『ヴォローネジ県の歴史、地理並びに経済の記述』の著者ボルホヴィチノフは一七六七年末、ヴォローネジのイリア教会の貧しい司祭の家庭に生れた。不幸にして九歳で父を亡くしたが、彼もまた聖職者の道を歩むべくヴォローネジ神学校へ入学した。ミトロフファン修道院に隣接する主教の館にあったこの神学校が設立されたのは一七二八年であったが、その後まもなく閉鎖され、四五年に再開されたのである。神学校を了えた彼は更に学業を続けるべくモスクワの学校への入学許可を申請した。こうして八五年、彼は伝統あるスラヴ・ギリシア・ラテン・アカデミーという最高学府の学生となった。またアカデミーの授業のない時にはモスクワ大学でも受講し、そこでノヴィコフ(НОВИКОВ, И. И. [1741—1808])のサークルの人びとと交流したのである。

一七八八年末、学業を了えたボルホヴィチノフは故郷の町ヴォローネジへ帰った。そして翌年から母校である神学校の教師として修辞学とフランス語を、その後更に神学と哲学をも担当した。同時に神学校の図書館の充実のために奔走し、モスクワへも何度か足を運んだ。また神学校の附属施設として設立された学寮の後見人としての仕事もあった。こうして約十年間、彼はヴォローネジ神学校の生徒の教育と生活の責任者として忙しく働いたのである。

こうした行政上の大きな負担にも拘らず、彼は学問のための

時間をみつけた。彼は九二年からロシア史の研究に入り、図書館で調査し、また古文書を探索した。だが若者のために祖国史の良質な本をつくりたい、という彼の仕事は中斷を余儀なくされた。そのために不可欠な資料や書物がこの町では手に入らなかったからである。そこで彼の眼は地方の歴史へ向けられた。

彼のまわりには民衆学校の教師、役人、神学校生などの同人が集ってきた。こうしてできた「ボルホヴィチノフのサークル」での会話と議論は文学、演劇から農民の貧困問題にまで及んだ。また彼らはみづから詩作をなし、外国語文献を翻訳し、そしてヴォローネジはじめての印刷所を開設したのである。「ボルホヴィチノフのサークル」は、こうして地方文化に顕著な足跡を残すことになるが、この点は両首都に集まりがちな研究者の眼にある種の反省材料を提供しているともいえるだろう。

ところでボルホヴィチノフの家系についての調査のなかで次のような興味深い事実が明らかにされている。一七九一年夏、ボルホヴィチノフは弟と一緒にヴォローネジ県の県貴族団長へ宛てて貴族身分への加入を申請した。それによると、彼らはコロトヤツク地区に世襲領を持っていること、彼らの伯父(祖父の代に分岐した)はコロトヤツクの領主であり、ボルホヴィチノフカ村に住んでいること、が身分資格に適合するものとして挙げられている。これはエカチェリーナ二世の例の貴族への恵与状(一七八五年)に沿っての申請と推測されるが、彼のサインのある申請書類がヴォローネジ国立古文書館に保存されているという。

ヴォローネジ地方の最初の歴史研究は、以上述べたような著

者の個人的環境と志向のなかで生みだされた。その時、ボルホヴィチノフはまだ三十二歳の若さであった。

## 三

『ヴォローネジ県の歴史、地理並びに経済の記述』は、正確には一七九九年に完成し、翌年に出版された。それ以後一度も再刊されたことのない「稀覯本」であったが、一九九二年にザゴロフスキー等の手によって『同時代人の記述にみる十八世紀ヴォローネジ地方』に収められた。約二〇〇年を経ての再刊であり、部数は二万部である。まず何はともあれ目次を掲げておこう。

場所、住民、空間及び出来事によるヴォローネジ県についての全般的な歴史知識。

都市ヴォローネジについての歴史知識

ヴォローネジ郡の記述

郡の諸都市の記述

ヴォローネジ主教区の記述

歴史知識の補遺

全体では原文一七六頁——再刊本による。以下同じ——の小著である。本書については「今日に至るまでその学問的意義を失っていない」という常套の形容が付される。だが言うまでもなく、本書は十九世紀半ば以降に急速に展開した古文書や考古学上の発見以前の著作であり、文字通りに受けとることはでき

ない。史料的价值、これが本書の第一義的な意味であることは否定できない。そしてこの点において、とりわけ貴重なのは「ヴォローネジ主教区の記述」の章である。司祭の息子として生まれ、神学校へ通学し、そしてモスクワにある神学の最高学府を修了したのち神学校の校長を勤めていた著者にとっては、この章は得意の分野であった。主教区にある多くの修道院の歴史と現状、歴代の主教についての詳しい経歴など、ヴォローネジ地方の「教会史」研究において彼は「第一発見者」の役割を担ったのである。他方で、この地方の地理や経済、そして住民の歴史についての記述は科学アカデミーのアンケートへの回答というすでに形成されていた伝統を引きついでものであって、まったくの獨自性を主張できるものではない。だがそうした個所にも著者の高い学術的能力と観察力とが結びあわされて示されており、もとより軽視はできない。以下では筆者にとって興味深かった二点をランダムに取りだし、簡単なコメントを付しておくことにしよう。

(一) 都市ヴォローネジの歴史においてピョートル大帝の時代は特別の意義をもつ。この疑いようがない意義をはじめて的確に位置づけたのが本書であった。この点について以下のように述べている。

この都市の甚だ記念すべき時代は、ピョートル一世なる君主、ロシアの改革者の統治期から始まる。けだし彼はそこに多くの国家的施設、とくに海軍のためのその礎を置くことによってこの都市を際立たせたからである。……

かの賢明にして甚だ活動的な君主は、一六九四年にヴォローネジへやって来て、ヴォローネジ河が、アゾフ海へ注ぐドンへのその近い流れの故に航行可能であること、そしてヴォローネジの周辺には造船に適した森林が多いことを見て、アゾフと全クリムの征服に向けての以前からの自己の見解に相応しい計画への好機を手に入れた。ここにアゾフ海のための造船所を設けることが決定されたのである。自己のあらゆる企てにおいて、かの君主が性急でせっかちであったように、この年に彼はヴォローネジに船職人と大工を、必要な指示と命令とともに派遣した。……

著書では更に造船所の位置、規模、そして船の建造などについて詳しい記述がつづくのだが、ここではヴォローネジの町へのピョートル大帝の着眼点の確に指摘されていることを確認すれば十分であろう。但し、現代の水準に照らすと一点だけ疑義がある。それは大帝が一六九四年にヴォローネジにやって来たことを示す史料はどこにも存在しないことである。確実なことは、第一次アゾフ遠征の失敗後の九六年二月末、ピョートルはこの町を訪れ、五月はじめまでの約二カ月間滞在して、造船の陣頭指揮にあたったことである。

ところで、ピョートル以前のヴォローネジの町については僅かの資料しか残されていないのであるが、偶然にもこの一六九四年のヴォローネジ川と附近の湖を描いた地図(次頁)が伝えられている。これはヴォローネジの町にあるウスペンスキー

修道院が水車(製粉所)の所有権をめぐる係争のために修道士に作成させたものである。修道院はこの地図を含む書類を翌九五年春にモスクワに送ったが、この係争が審理されたかどうかは不明である。確かなことは、まさにこの地図に示された河川や湖を舞台に造船所がつくられ、そして河岸にはツァーリをはじめ政府高官の館が立ち並ぶのである。(但し、そのほとんどは一七四八年五月の大火で焼失した)。

(二) ピチューク河はヴォローネジ地方の中央部を走ってドンに注ぐ。このピチューク河と隣接のイコレツ川の流域に、十八世紀はじめに中央部の御料地から大量の農民が強制移住され「御料地ピチューク郷」が形成された。その具体的経緯については拙稿に分析を試みたのでくり返さない。一七二一年の人口調査によると、ピチューク郷には、農民一、二九五人が登録されていたのである。このピチューク郷にはその後も移住が実施されたが、郷の中心であるポプロフスコエ村は一七七九年にポプロフ郡の郡都へと格上げされ、ポプロフを名のる。ピチューク郷はここに廃止されたのである。この郡についてボルホヴィチノフはどのように書いているだろうか。

ポプロフ郡は南北に一四〇ヴェルスタ、そして幅九〇ヴェルスタであり、総面積は七八〇、四四四デシヤチナと四八二サージュンである。人口は第五回の調査によると、男女合わせて八三、六五四人である。特徴的なのは郷士が約二万人と多いことであり、かつての辺境の防衛地域の名残りをとどめていた。「臣従ウクライナ人」も約一六、〇〇〇人と多い。他は種々のカテゴリーの農民であり、貴族は一握り(男九三人、女七六



人)である。教会は木造が圧倒的で三七、石造は四にすぎない。村の数は三五に達し、その他に集落四、小村二、部落及びフートル二八、荒蕪地一四、そして水力製粉所六四、となつてゐる。この他にビチュルク川とイコレツツ川についてのかなり詳しい説明、あるいは郡を通る三本の駅通道路などにも言及される。そして次のような記述がみられる。

……ポプロフ地方の土地は大部分が黒土であり、所によっては砂地そして石灰岩である。穀物はあらゆる種が豊富にとれるが、とりわけ畜産並びにすばらしく良質の馬の(産出)地区として名高い。……

この「すばらしく良質の馬」については、『一七八五年のヴォローネジ県令の記述』でも次のように指摘されている。すなわち郡内のヴェルホルティシヤンカ村で三位一体祭に開かれる一週間余りの定期市での「最も主だった商いは、周辺の飼育場や住民、またドン・カザークが追いたててきた三、〇〇〇頭にのぼる馬の売却である。その馬を買うのは大部分、トゥーラ、カールガ、オリョールそしてエレツツの町々からやって来た商人や御者である」とボルホヴィチノフの記述を裏付けている。

結びに代えて

ヴォローネジ地方の最初の歴史研究者ボルホヴィチノフは、その著書が出版された一八〇〇年のはじめ、突然の不幸に襲われた。一度に妻子を失ったのである。この個人的悲劇が彼をヴ

ォローネジから去らせる契機となった。修道士となり、エフゲニーを名のつた彼は、その後教会人としてすばらしい経歴をたどった。一八〇四年に主教、一六年に大主教、そして二二年から生涯最後の日までキーエフ府主教であった。この間、学問も続けられた。ノヴゴロド、プスコフ、そしてキーエフの古代を研究し、ロシア著作家辞典を作成し、グルジアの歴史叙述を残した。また教会音楽さえ作成した。ロシア全土にその名を知られた「府主教エフゲニー」が亡くなったのは一八三七年二月のことであった。そしてその年、中村喜和教授の指摘によると、ヴォローネジ県のボグチャールで生まれ、移転先のポプロフの教会の司祭の私塾でうけた苦々しい体験から「異常なほどの僧侶嫌い」になった少年がヴォローネジの町の中学校に入学した。のちの民俗学者アレクサンドル・アフナーシェフである。ヴォローネジ県は、こうしてまったく対照的な二人の著名な人文学者を生み出したのである。

※ヴォローネジ地方についての主要な歴史文献

- ① Болховитинов, Е. А. Историческое, географическое и экономическое описание Воронежской губернии. Воронеж, 1800
- ② Военно-статистическое обозрение Российской империи. т. XIII ч. 2 Воронежская губерния. СПб., 1850
- ③ Воронежская беседа на 1861 год. СПб., 1861
- ④ Елагин, С. И. История флота в России. т. 1 Азов-



- ский период. СПб., 1864
- ㉔ Воронежские петровские акты. Воронеж, 1872
  - ㉕ Воронежский юбилейный сборник в память трех-столетия г. Воронежа. т. 1-2. Воронеж, 1886
  - ㉖ Материалы по истории Воронежской и соседних губерний. т. 1-Воронеж, 1861-
  - ㉗ Воронежская старина. вып. 1-14. Воронеж, 1901-1916
  - ㉘ Памятная книжка Воронежской губернии. т. 1-33. Воронеж, 1856-1916
  - ㉙ Труды Воронежской ученой архивной комиссии. вып. 1-3, 5. Воронеж, 1902-1914
  - ㉚ Чистякова, Е. В. Воронеж в середине XVII века и восстание 1648 года. Воронеж, 1953
  - ㉛ Очерки истории Воронежского края. т. 1. Воронеж, 1961
  - ㉜ Загоровский, В. П. Белгородская черта. Воронеж, 1969
  - ㉝ — Изюмская черта. Воронеж, 1980
  - ㉞ — История Воронежского края от А до Я. Воронеж, 1982
  - ㉟ — Воронеж: историческая хроника. Воронеж, 1989
  - ㊱ Важинский, В. М. Землеулаждение и складывание общины однодворцев в XVII веке. Воронеж, 1974
  - ㊲ Записки Воронежских краеведов. вып. 1-3. Воронеж, 1979-1987
  - ㊳ Воронежский край с древнейших времен до конца XVII века. Документы и материалы по истории края. Воронеж, 1976
  - ㊴ Воронежский край в XVIII в. Документы и материалы по истории Воронежского края. Воронеж, 1980
  - ㊵ Описание Воронежского, наместничества 1785 года. Воронеж, 1982
  - ㊶ Воронежский край XVIII века в описаниях современников. Воронеж, 1992
- 中村喜和編訳『フナマナシーモン、ロシア民話集』、岩波文庫、下巻、一九八七年
- 拙稿「ふる強制移住」、『一橋論叢』一一二卷、一九九四年
- (一橋大学教授)